

聖書の祈りが私の祈りになる（旧約編）

第2章 モーセの祈り



国としてのイスラエルの設立によって族長時代は終わりを告げ、神はご自分の民を、シナイ山でモーセに与えられた国家的な契約の下で取り扱い始めました。しかし、神のご臨在に近づくことについては、以前と変わらず、難しいことではありませんでした。神は、ご自分のみことばに従う人々、ご自分のことを知りたいと願う人々に罪の赦しを与えるためには、また、彼らと親しく交わるためには、時代に応じて異なる方法をお用いになります。しかし、どの時代も変わらないことは、人間との交わりを回復したいと願っておられるということです。

旧約聖書の人物の中で主への祈りに関与している人の誰を取っても、その祈りの結果にせよ、祈りの神学への影響の大きさにせよ、モーセに匹敵する人はいないでしょう。もっともなことです。というのも、モーセはやがて自分のような預言者が起こされることを預言しているからです。

ペテロは、キリスト・イエスこそがその預言の成就だと見えています。

「神である主は、あなたがたのために、私のようなひとりの預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる。この方があなたがたに語ることはみな聞きなさい」（使徒 3:22、申命 18:18 も参照）。

モーセが、とりわけイスラエルをエジプトの束縛から解放して以降、実質的に専心していたことは、祈ることと神とのコミュニケーションを持つことでした。彼の耳は神に強く向けられていました。このため、聖書は「**主がモーセにお命じになったように**」という言葉で彩られているほどです。この表現は、出エジプト記 39 章、40 章だけでも 18 回、見られます。イスラエルのリーダー、解放者としてのモーセの生涯は、神との親密な交わりによって特徴づけられているのです（本書の取り扱う範囲としては、神とモーセの間に交わされた言葉の全例を詳細に調べることはできませんが、そのような学びをしてみるならば、きわめて多くのものが得られることでしょう）。

聖書には語られていないものの、モーセの祈りの生活はおそらく、敬虔な人物であった母親がひざまずくその横で始まったことでしょう。幼い頃にアブラハム、イサク、ヤコブの体験について学んだことと並び、この習慣は、不敬虔な人々からの圧力や誘惑に直面する中に非常に深い形で現れる、彼の優れた敬虔な姿勢を理解するうえで、大きな手がかりを与えてくれます。

信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。（ヘブル 1:24-26）

神の召しに応答する

神の召しに**応答する**モーセの祈る様子の最初の記録は、出エジプト記3章に見られます。

しかし、ここで主導権を取っているのは神です。というのも、最初に話しているのは神だからです。

モーセは、ミデヤンの祭司で彼のしゅうと、イテロの羊を飼っていた。彼はその群れを荒野の西側に追って行き、神の山ホレブにやって来た。すると主の使いが彼に、現れた。柴の中の火の炎の中であった。よく見ると、火で燃えていたのに柴は焼け尽きなかった。モーセは言った。「なぜ柴が燃えていかないのか、あちらへ行ってこの大いなる光景を見ることにしよう。」主は彼が横切つて見に来るのをご覧になった。神は柴の中から彼を呼び、「モーセ、モーセ」と仰せられた。彼は「はい。ここにおります」と答えた。(出エジプト記3:1-4)

ここで注目すべきは、人は神からの声を初めて聞いた時ほどよく祈れる時はないということです。これは、燃える柴を見るまで祈るべきではないという意味ではありません。神のみことばに常に注意を向けるべきだという意味です。それが祈りにインスピレーションをもたらすものとなることがあるからです。

神に**応答**すると、モーセはすぐに神からの命令に直面するところとなりました。「ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である」(出3:5)。この命令は、一見したところ奇妙に思われるかもしれませんが。とりわけ、「神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます」という、ヤコブへの手紙4章8節に照らし合わせてみると顕著です。しかし、モーセはそれ以前に次のことを学ばせられていました。すなわち、宇宙を支配する偉大な神は、まさにそのご性質として**きよさと正義**を含んでおられるのであり、この神に近づくということは、そのご性質を認める必要があるということでした。言い換えれば、神に近づくということについて、モーセの将来の啓示のための舞台が整ったということです。

モーセがこの時点に至るまでに既に神に対して密かな信仰を抱いていたことは、周知の事実です。しかし、神についての知識において不十分な領域があったということもまた明らかです。

「モーセは神に申し上げた。『今、私はイスラエル人のところに行きます。私が彼らに「あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました」と言えば、彼らは、「その名は何ですか」と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか』」(出3:13)。



クリスチャンは今日、旧約聖書と新約聖書という完全な啓示をいただいています。しかし、彼らにとって緊急に必要なことは、モーセのように、神の力強い存在をさらに強力に体験することです。聞かれる祈りと信仰面における指導力とは、かなりの部分、神に対する私たちの見方によって左右されます。したがって、神は自ら進んで、ご自分のしもべに、ご自分を見ることのできる包括的な見方というものを分かち合ってください。「神はモーセに仰せられた。『わたしは、「わたしはある」という者である。』また仰せられた。『あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。「わたしはあるという方が、私をあなたがたのところを追わされた」と』」(出3:13)。「わたしはある」とは、進行中の行為を現すヘブライ語の形式です。それは実際には、「私は、自分が何者であるかを、自分が自ら行うことによって示すつもりだ」という意味です。12節には、ヘブライ語の同じ言葉が

「私は…いる」と翻訳されており、それゆえ、神の名前は、「わたしはあなたとともにいる」という約束と密接に結びついているのです。

神はそこからさらに、イスラエルを解放するためにご自分がなさろうとしていることを啓示されます。中には次のように考える方もあるでしょう。すなわち、神からそのような生々しくも畏れ多い啓示があったことから、モーセは新しい課題に十分な確信を持って向き合えたことだろう、という考えです。しかし実際は違いました。神に対する見方がいかに崇高なものであっても、私たちは、自分はふさわしい者ではないという恐れから逃れることはできません。しばしば、逆こそ真となります。すなわち、「わたしはある」という方に対する見方が大きければ大きいほど、自分を「わたしはある、ではない」と考える私たちの見方も大きくなるのです。

モーセには大きな心配が二つありました。この二つは、新しく与えられた使命から生まれたものでした。彼はまず告白しています。「私は人々の不信仰を扱うことができません」(出 4:1 を参照)。そして不平を言っています。「私は言葉が流暢ではありません」(出 4:10 を参照)。しかし、これらの劣等感のどちらに關しても、神には答えがありました。あらゆる「私は…ではない」について、神には「私は…だ」がおりなのです。かくしてモーセには、超自然的な現れと超自然的な能力が与えられました。私たちは今日、モーセに起こったよりも少ないものを期待すべきでしょうか。

「そこで、彼らは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばに伴うしるしをもって、みことばを確かなものとされた」(マルコ 16:20)。

? 質問

1. どの時代にも変わらない神の人間への願いは何か？
2. リーダー、解放者としてのモーセの生涯を特徴づけていたものは何か？
その特徴ある生活はだれの影響によると考えられるか？
3. モーセは、神の言葉に促されて応答して祈った。私たちが聞かれる祈りを体験し、指導力を発揮するために必要なことは何か？ 神がどのようなお方かを御言葉から理解する時、自分の祈りが豊かになった体験があればわかり合おう。
4. 新しい課題に取り組む時、主が共におられると祈りを通して気づいたなら、どのように見方が変わり、どのような心境を経験するか？
5. あなたはモーセのような劣等感や不安にさいなまれることはあるか？
自分にはできないと弱気になる時、何をどう祈ればよいと思うか？
6. 今日読んだ箇所から、あなたは祈りについてどんなことを教えられたか？
どんな事を実践したいと思うか？